

小學
日本修身書

高等科
生徒用

卷七

K120.1
61.4
7

K120.1

61.4

7

稻垣千穎編述

高等科
生徒用

小日本脩身書

東京 成美堂發兌

小日本脩身書卷七

稻垣千穎編述

君の代は、千代ふ八千代よ、さざれ石は、
いとほしとなりて、苔のむもまで、

聖諭小解

朕惟フニ、我が皇祖皇宗、國ヲ肇ムルゴト宏遠ニ、
徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ、

謹案むるに、此の項ハ、我が國開闢のそとめり、
御代御代の 聖上、邦家を開き建てたまひ

小日本脩身書

卷七 高等科

成美堂發兌

稲垣千穎編述

高等科
生徒用

小日本脩身書

東京 成美堂發兌

小日本脩身書卷七

稲垣千穎編述

君の代は千代は八千代よ、さざれ石は、
いもほとなりて、苔のむをまで、

聖諭小解

朕惟不ニ、我が皇祖皇宗、國ヲ肇ムルゴト宏遠ニ、
徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ、

謹案むるに、此の項ハ、我が國開闢のそとめよ
り、御代御代の 聖上、邦家を開き建てたまひ

し御功業宏大にして、御威徳高遠なりけむば、
天日嗣も千代八千代不動ふく、天地と共に窮
なく、いや榮に榮えまほ、本の理を詔りたまひ
しあるべし、

皇祖皇宗と稱へ奉るは、我が 聖上の御祖先、
御代御代に御事ふり、御代御代の 天皇も、悉
く聖神文武ふわたらせたまひつゝ、今一一
ふ其の御功業に記し奉る可らず、故ふこゝに
は、畏けまども、謹で 天祖天照皇大御神の、此
の國を以て 皇孫ふ寄したまひ、 皇宗神武

天皇の中國に一統したまひし御事迹を述べ
て、其此一端を示はべし、

天照皇大御神

天照皇大御神の、神伊弉諾伊弉冉尊の御子に
ましまして、高天原を治めたまへり、 大神、其
の御子 天忍穂耳尊に降して、豊葦原瑞穂國
を治めしめたまへり、武甕槌神經津主
神、天穗日命等を天使として降したまへり、是
の時ふ當りて、 大神の御弟素盞鳴尊の御裔
なる大國主命、出雲國にたもして、假ふ此の國

を領したまひけるが、天使來りて詔を傳へければ、速に奉じたまへり、天使乃此のよを復奏しけるに、是より先は、忍穗耳尊の御子瓊瓊杵尊誕れたまひけまば、御父尊は、此の御子を以て、己尊に代つて降らしめんことば請ひたまひしに、大神之を容したまひて、八咫鏡、天叢雲劍、八坂瓊曲玉、三種の神器を以て、天日嗣の御志るしに御寶として、皇孫に授けたまひて、豐葦原瑞穗國は、我が子孫の王たるべき地なり、皇孫往きて治めたまへ、寶祚

の隆盛ならんこと、天壤と共に窮なけんと言したまへり、皇孫瓊瓊杵尊勅を承け、諸部の神等を率ゐて、日向國高千穗峯に降り、ここに皇宮を奠めて、天下を治めたまへり、

神武天皇

神武天皇は、瓊瓊杵尊の御曾孫おましまし、初も高千穗峯におこしけり、此の時不當りて、東國大亂れ、君長相戦ひけまば、天皇亂を撥めて國を平にせんと思し召し、諸皇兄及諸皇子と謀り、舟師を率ゐ、西海山陽の諸國を歴

て、攝津小上陸し、東、膽駒山を踰えて、大和小入らんとしてたまひしに、賊帥長髓彦衆を悉して孔舎衛坂小逆へけまば、皇軍路を轉じて紀伊より向ひ、往く往く諸賊を殲し、遂に長髓彦を平げて、全國を一統し、後、大和の畝傍山の東南、橿原の地を以て皇城と奠めて、天皇此位小即かせたまひ、かくて天神地祇を祀り、功臣を賞して、永く太平の基を開かせたまへり、

我が臣民、克く忠ニ、克く孝ニ、億兆心ヲ一ニシテ、世々厥ノ美ヲ濟セルハ、此レ我が國體ノ精華ニシテ、教育ノ淵源、亦實ニ此ニ存ス、

我々の國も、開闢のそとめより、君臣の大分、固く定りて、千世萬世に變ることなく、御代御代の聖上、臣民を惠ませ給へること、實に慈母の赤子を愛はるが如し、されば、其の御洪恩、深く臣民の骨髓に浸入して、皆れれのづゝら忠節を重んじ、孝道をそげ、衆心一致して、敢て違ふことなく、子々孫々に相傳へたり、

此の忠孝の心は、強固なるは、實に我が國體の、

世界小卓絶せるものふりて、其の純粹秀麗なること、萬邦の仰ぎ羨むところなり、是をわしふがら、皇祖 皇宗の深く大御心を注ぎたまひて、臣民を斯の道に導かせたまひし効果なきは、教育の大本、いさぐで此の外ふあらん、是此の項の大意なるべし、

菊池寂阿

元弘の亂小菊池入道寂阿ハ、小貳入道妙慧大友入道具簡と議して、官軍に參るべきふり奏しけまむ、綸旨に錦の御旗を添へて下されけ

り、九國の探題北條英時これを洩れ聞ききて、安からぬことに思ひて、菊池を博多へ呼びけれむ、菊池、さてハ我ガ隱謀あらまきふらん、此方より押寄せ、直に勝負決せんとして、此のよしを小貳大友ふ觸れつゝあそしけるふ、二人心變じて、應ぜざりけまば、菊池大ふ怒りて、よしよ、彼等の與せぬ軍もせられぬはとて、元弘三年三月十三日、僅に百五十騎あて、英時の城へ押寄せ、命をそて、戦ひけるに、小貳大友六千餘騎あて、菊池の後より攻めかゝりぬ、

菊池これを見て、嫡子武重を召びて、我今小貳大友ふ出し、抜りれて、此の難儀ふ臨めども、忠義のためふも、命を失ふんこと、後悔はず、されむ、我の英時が城を枕として討死をべし、汝も急ぎ故郷ふ歸りて、城を堅くし、兵を起し、我が生前の志を遂げよ、といひけまば、武重、父の討死をる、汝見すて、歸るに忍びば、一所ふてこそ、と再三いひけまども、汝をば天下のため、に留むるぞとて、従そざりけまば、泣く泣く肥後へ歸りけり、菊池、今も心安しとて、二男肥後三

郎と共に、百餘騎を前後より立て、英時の城に責入り、終ふ討死せり、其の後、肥後ふて、武重、武光等相繼ぎて、官軍ふ屬し、屢賊軍を惱めて、勇威を九州ふ振へり、

龜田窮樂の孝行

昔京都堀河の傍ふ、龜田窮樂といふ人ありけり、或る時友人來りて對話しけるが、折ふし大雨俄ふ來りて、河水大ふ漲り、水聲高く聞えけまば、老母他室より窮樂を呼びて、彼のいゝめしき音の何ぞと問ふ、窮樂友ふ謝し、其の室に

いたりて、慙慙に、堀河の水漲りて、斯く響くふり
りと答へて、徐ふ席より復りしむ、幾程もななくして、
母又窮樂窮樂と呼ぶ、窮樂又客に謝して、其の室に
至まば、彼の音いと問ふ、窮樂愈慙慙に、大雨來りて、
堀河の水漲りければ、水聲斯のごとく高く響くありと
答ふ、窮樂席より復まむ、母又窮樂と呼びて、問ふこと
前のごとくあるに、窮樂謹みて答ふることも亦初の如く
し、友人怪みて其の故を問へむ、我が母老いて病みと
れば、今聞きて今忘るゝが故ふ、斯のごときあり

と答へて、慙然たること久しかりき、

爾臣民、父母ニ孝ニ、

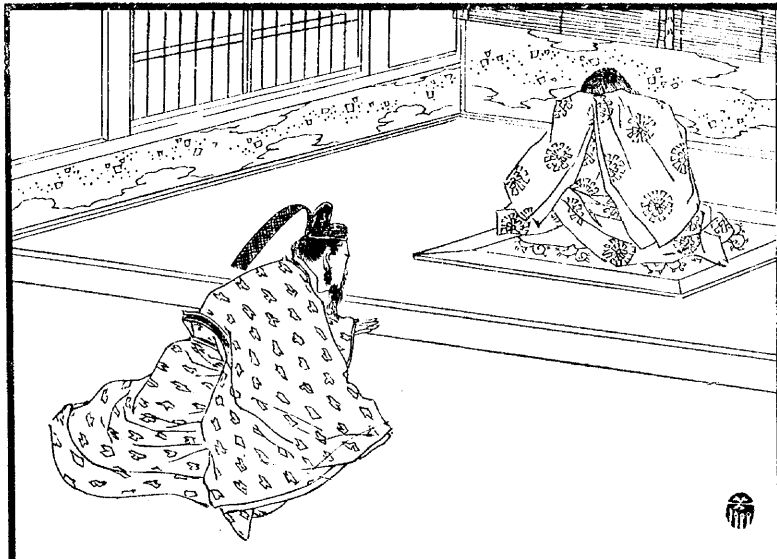
父母の其れ子を生育するハ、晝夜艱難辛苦、
いとむげ、常にあらき風をも厭ひて、抱きそだ
て、撫でさまり、やゝ生長すれば、學校へ入らせ
て、學藝を習もせ、それ身をこやゝに、其の心た
ぶしき人ふあれか、と、萬に斷え、心をとらど
きて、志むの間に忘るゝひまなし、其の恩を
あり知る可らず、されば、身成慎み家をたこし

て、父母を孝養するは、實小子たるもの、務あり、故に父母に孝ふと宣つるなり、父母は孝養するに、愛敬の二を失ふつららば、愛とい、戀ひ志たひ情あつきあり、敬とい、謹まうやまひて、禮儀をつくはふり、愛はみありて敬あけまば、竟に狎れあなどるふいたることもあり、人豈これと異ならざらんや、よろしく敬を行ひてこそと分つべし、然まども、敬のみありて愛あければ、親子の間、嚴ふそぎて、或も間隔

を生むることもあり、故に愛と敬とは、父母に事ふるに尤大切なるものあり、よくこれを勉むべし、

第九宮

後醍醐天皇、北條高時の請ふよりて、御心をらすも、隱岐の假宮おまし、まゝ時、御子第九宮と、いまど御幼稚におましませばとて、中御門宣明卿おあづけらきて、都の内よぞおとしける、此の宮、今年八歳にふらせたまひけるが、御心さま賢くたましければ、常に我一人都



不止まらんこと心ぐ
 るし、あなれ我をも、
 主上のれをーまにあ
 たりへ遷せ可し、せめ
 てよそあがらも、御た
 より成うけとまそら
 ん、と仰せられて、涙ふ
 咽びたまひ、よろづ悲
 しき御氣色ありける
 が、或る夕中門ふ立た

せ給へる折ふし、遠寺の晚鐘幽ふ聞えけまば、
 つくづくと思ひふらして、入相死、

鐘を聞くふも、君どこひき、

と一首の御歌をよませ給ひけるが、歌に意の
 れどなきさ、いと哀ふ聞えけまば、其の頃、京中
 の僧俗男女、これを疊紙、又ハ扇ふどに書きつ
 けて、是ぞ八歳の宮に御歌よとて、其の御孝心
 のほど、誠感し奉らぬ者もあなりけり、

兄弟二友三

友とは、兄弟互ふ親み愛をる哉いふ、姉妹の間、
兄妹の間、姉弟の間も、皆これと同じ、抑兄弟を、
其の親みの厚きこと、親子に亞きたる天倫ふ
り、同じ父母より出でて、同じ居宅ふ生長し、出
入飲食、よろづのこと、もべて相伴ふりのあれ
を、兄の弟を愛して、其の及むざる所を助け、弟
は兄を敬ひて、其の命に隨ふべし、然るときは、
父母も心哉安んじて、一家よく和睦し、樂しく
世を送ることを得べし、
然るふ彼生長して、家を分ち妻を娶るに及べ

む、小利害のために相互目し、他人のごとくに
相視ることあるは、歎可はしきこと、謂
ふべし、一朝艱難の我が身に來るとき、力哉出
して援助ををるりの、何物もよく兄弟に及む
ん、されば兄弟にして、も其の友愛を忘る事
を、身毀損じ家を亡し、父母此名を汚すことあ
るべきあり、

松平定信

松平定信は、固より友愛に厚き人あるが、其の
兄松平定國といひ、ことに親しく交りけり、或る

時、濱千鳥の繪に繼色紙を持せて、定國のもと
ふかくり、これよ

千鳥さへ、友呼びかえし遊ぶなり、

ふどてゝ人死ひとりたのしむ、

といふ歌を書きて賜ふるべしと云ひ遣りけ
るに、定國も又同トキ畫箋をわくりて、同トキ
歌を書きて賜ふりたしといはせけり、此の歌
も、定國定信の父ある田安宗武卿の詠じたり
しそのふして、兄弟相思ふ意を寓せたるあり、
定信兄弟、ともに父の遺訓を服膺して、互ふ其

の筆迹を乞ひける友愛れほど、いとめでたく
なん、

富女

嘉永年中、大阪松屋町に富女といふものあり
て、仁三郎といふ兄と、二人の弟とありけるが、
皆よく其の母に仕つけり、或る夜盜賊數人、双
を揮ひて侵入せしに、母も幼兒を懷きて、まづ
遁まければ、盜賊仁三郎を捉へて金を求む、仁
三郎大ふねをれて、我も此の家を下僕ふれば、
金を藏むる所を知らばといへど、盜賊肯らず、



刀背を以て仁三郎を打てり、富女これを見て悲ふ堪へば、曾て人より與へらまゝ金を取出して、賊刃の下に走り往き、是參らせん、兄を許し給へ、猶許されずば、兄の代ふ我を殺し給へといふ、其の聲色決然として、動す

べくもあらざりけまば、賊等大に感激して、世ふいかゝる優しき女兒もありけりとして、立去れり、其の後、此の盜賊、官に捕へらまゝし時、富女の事を語りけまば、官、富女を召し、其の友愛を褒して、白銀若干を賜ひけり、

夫婦相和シ、

和といふ夫婦互に親愛して、乖き戻る心なく、よく其の苦樂を共ふる哉云ふ、蓋夫ハ外を治め、妻ハ内ををさめ、相待ちて家を成すものな

れば、夫も妻も對して、禮義正しく、和愛の情を濃ふし、妻は、夫に對して、敬順の心を厚くすべし、またし、み馴るゝふまかせて、敬と和とを失ふべからば、斯のごとくに、互に己の職分を勵み、家業を勉めらば、一家の幸福は、期して待つべきあり、

然るに、夫婦を、和合せざることあらば、一家治らばして、父母も心を痛め給ふべし、又其の子女等も、父も從へを母も背き、母もまた、父も背くざるべからず、進退依る所を失ひ

て、竟にも放蕩無頼の行爲をなすにいたるべし、されば夫婦の不和は、其の身は不幸のみならず、あらば、一家衰亡の基となるべきなり、人の夫とあり婦となるもの、これを思ひて、和合親愛の道を忘るべからば、

皇后宮

申はも畏き御事ながら、我が 兩陛下は、和合の御徳、天の高きが如く、地の厚きが如く、おたをしませり、是我等臣民の、常に仰ぎたてまつる事あり、或る年、車駕北陸に巡幸したまひ

し時、皇后宮ハ大宮の中におはしませして、暑熱いと厳しけまば、御途上いゝふと想ひ遣らせ給ひ、

大宮れ、内ふありても、暑き日に、

いゝなる山を、君は踰ゆらん、

と詠せさせたまへり、御敬愛の大御心、いとありがとくある、

赤深衛門

和歌に名高き赤深衛門ハ、大江匡衡の夫人あり、或る時、藤原公任卿、中納言の官を辭せんと

て、當代の學士數人ふ囑して、其の辭表を作らせしに、一も我の意は稱ふりのかりけまば、其の作文は匡衡みぞ請ひける、匡衡承諾して家ふ歸り、いゝに綴らば彼の意ふ副そんかとして、頻ふ心を惱しけまば、眉目れ間に、憂色あらとれける哉、赤深怪み問ひて其のよゝを聞き、あむらく沈思しけるが、やぶて、彼の人の外面を飾りて、人に誇るを喜びたまふところを聞き侍れ、さまば其の表文ハ、まづ盛に彼の人に門閥を述べ、少しく其の世は遇まざるの意

と露したまふべし、必其の意に適ひ侍るべし、といへり、匡衡其の言を容きて辭表成作りしに、公任果して喜びけり、

朋友相信ジ、

信ハ誠なり、心不誠ありて言に詐ふきを云ふ、故小朋友相信じとは、人々相交るに、たがひ不誠を盡して、懇切不表裏なく、善道を以て相導き、言行一致して、相欺き陥るゝことなれ、と宣へるなり、

人、よく世に出でて身を立てんと欲せば、朋友の助力なくむあるべからば、朋友ハ、議論を上下して、人の人たる道を研究し、事成共ふし業を同トくして、我が身比及むざる所を補ひ、互に進み互に勵みて、深切不相助くるをのなれむ、其の交ハ、兄弟のごとくせざばあるべからず、然まどもよく骨肉の親あるにあらば、只一片の意氣を以て相交ることなれむ、殊不信を厚くせざれば、終始其の交を完くする事能わざるなり、

朋友も先擇びて後子交るべし我信を以て彼に交る故に彼の言我に入り易し彼より惡しき心あらば我必これ子誘われて竟に彼と類を同じくするにいたらん故に古聖は益者三友損者三友あり直をともし諒を友とし多聞を友とするは益あり便辟を友とし善柔は友とし便佞を友とするは損なりといへり朋友の交意を用ひずばあるべからば

前田利家と羽柴秀吉

前田利家の羽柴秀吉柴田勝家と友たりしが

殊に秀吉とい、其の交深かりけり、勝家、秀吉と相戦ふに及びて、利家のいづきに敵をる心なけきども、勝家の配下たりしるば、已むこと成得ず、勝家不應援したりけり、然るに賤ヶ岳の一戦に、勝家軍敗きて、北庄に引退るんとする時、利家の居城府中に立寄りけき、利家出迎へて、飯を進め、馬を贈りて、彼の勞を慰めけり、かくて立出でんとするに臨み、途まで送り行るんといひけるを、勝家押止めて、足下ハ秀吉と交厚し、然るを、義よりて我不應援し給ひ



し、我が深く謝する所なり、今も我を心とせばして、秀吉と其の友義を全くし給へと、言ひて、涙を吞みて辭し去りぬ、程なく秀吉軍、進めて府中、小近づき、單騎鞭を揚げ、城門、小來て、又左、又左、秀吉來たりと云ふ、利家

聞きて驚きつゝ、直、出で迎へて、利家、今日、足下に對する面目を失へり、速、小屠腹して、終、を潔くせんといひけまば、秀吉、打笑ひて、うたてき言を聞くものゝ、今、今日の事、秀吉、よく、足下の心を知まり、足下、亦、秀吉、此、志、以、知らん、か、むありの事、ふて、い、か、で、平生の交誼を敗るべき、天下の事、僕、深く、足下、に、依、賴、す、足下、力、を、添へ給へといひけまば、利家、其の言に感激して、遂、お、彼、が、腹、心、と、い、ち、り、に、け、り、か、ゝ、る、戰、亂、の、間、よ、い、い、と、め、で、た、き、例、ふ、り、を、し、

南宮大湫と紀平洲

南宮大湫と紀平洲とい、ともに名古屋の中西
淡淵の門人ありて、無二の朋友あり、平洲江戸
に出で、聲名世よあらざる、お及びて、書を大
湫お寄せて、江戸に来るべきこと、或と、めけ
り、あるお大湫も、諸方お漫遊して、平洲と相
見ざる、こと二十餘年の後、おづめて江戸に來
りて平洲を訪ひけまば、平洲の喜譬へんか、と
なく、手紙握りて別後の情を語り、互お膝のす
まむを忘れけり、これより平洲も、疾ありと稱

して來客、或謝絶し、唯大湫と一室の中に對座
して、日夕我を忘れて談笑し、又他事、或顧るこ
とありけまば、塾生等相驚きて、二先生二十
年來の渴情を慰して、かへりて又狂疾を得た
まへりといひ合ひけり、かくて大湫は、二十五
日の間、平洲の家お留りて、寸歩も他出せざり
しが、其の後おづめて己が寓所お歸りけると
ぞ、

恭儉己ヲ持シ、

恭とい、己を卑下し人を尊敬して、行儀を鄭重に
にそるなり、儉とい、我が身錢檢束して、言行放
恣ふらざるなり、財用を節する意も、まと此の
中に含めり、されど恭儉己を持しとは、言行を
檢束して、行儀を鄭重おし、道を守り規則より従
ひて、傲慢不遜ならんやうに、其の身を持つ
べしと宣へるあり、

世お己の小技末藝お誇りて、人より高ぶり物
に奢るりのあり、我其の心此甚愚ふる錢憐む、
いかにとふれど、驕むば、智を啟き徳を進むる

路なく、奢れば、財竭き用乏し、智徳進まばして
財用乏しけむ、何を以てり世に立つこと錢
得ん、畢竟耻辱を蒙り困窮お陥りて、空しく一
生涯を過すべし、豈愚なるにあらばや、されど
も、恭ふも又其の度あるべし、下るべふらざる
に下り、遜るべふらざるに遜るは、是恭の道お
あらばして、諂諛より近し、諂諛の惡行たるは、今
又言ふまでもあらば、人を遇するは、其の身此
分お應じて、禮讓を盡すべし、又財を約すると
財を吝むと錢混すべふらば、約もつばまやう

ふるなり、吝嗇ハをいむあり、よくこれを念ふ
づし、

徳川秀忠

徳川秀忠公は、後水尾天皇の中宮東福門院
の御父なりけきを、朝廷おても重く用ひさせ
たまひけり、然れども公ハ、居常をこしも驕ま
る氣色なく、ことに參内せし時も、便室お休憩
するおも、絶えて情容あることありき、又病
に臥志し時、一朝も頭髮を梳ること、或廢せざ
りしかむ、侍士等、かくてハ疾病を重くするこ

ともやあらんといひしに、たとひ病ありとて
も、天下の政事ハ敬みて聽るべきあるべら
ず、是我がつとめて鬢髪を梳るゆゑあり、とい
それけるとぞ、

徳川家康公

秀忠公の父家康公も、又恭儉の徳を具へし人
なり、秀忠公の恭儉ふるハ、其の薰陶およりし
りの多るるべし、公常に白色ハ澣衣を好みけ
まば、女房英勝院、或る時公よ向ひて、君好みて
白色の澣衣を召したまへども、これを賤しき



者に洗そめば、君は
 威嚴を汚し侍るべし、
 されむ侍女も洗そめ
 めんとそれど、其の手
 指軟るべきは、物此用
 不立ちがとし、君今ハ
 位高く富足りたまへ
 る、澣衣を召さざるも、
 人孰うこれを奢侈と
 申さん、願そくば今よ

り後、澣衣を召ほこと、或止めたまへといひけ
 るを、公打笑ひて、汝等婦女の事ふれば、かく思
 へるも理なきにあらば、汝等ハ駿府の倉庫を
 視るのみふても、布帛米粟の多き不驚くこと
 なるべし、然もども是大海中此一粟のみ、我ハ
 倉庫ハ、京都、大阪、其の他、亦も數多ありて、其の
 倉庫ごとに、此の物ども或積みたること、山の
 ごとし、されば、我日々百匹の衣を着るとも、い
 さ、かも足らざるを憂へば、されども、子孫萬
 世のためと、天下泰平のためと、或思ひて、かく

は質素の澣衣を着けて、奢侈を誠むるあり、といもれけり、富貴身にあまりて、物不足らざることなき人ふても、恭儉なりしこと斯のごとし、勉めざるべけんや、

博愛衆ニ及ボシ、

博愛といひ、ひろく人をいつくしみて、これを憐み恵むを云ふ、抑、愛ハ人の天性なり、人誰々其の父母妻子を愛せざる者あらん、又秀美なる花色を視、婉轉たる鳥聲を聽きて、これを愛せ

ざるものあらんや、此の愛も、他の教を待らて知るにあらば、又人の誘ふ倚りて悟るふもあらず、只我が心のおのづからこゝに至るなり、故小愛も人此天性ありといふ、人既し此の心あり、これを推して廣く衆人の上に及ぼさば、是博愛衆に及ぼしと宣へる聖旨ふ合ふべし、

然りと雖、愛を施すふハ、厚薄と順序とあるべからば、あるべらば、まづ 君上父母兄弟を愛するは、愛の大本あり、夫婦相愛をることハ、これと

均しかるべし。次は朋友を愛し、同國人を愛し、其の次に外國人を愛すべし。禽獸蟲魚草木は、又其の次を愛すべきのなり。然るに此の次第を守らばして、父母兄弟を愛すると同じく、外國人を愛それむ、我が身死亡し我が家を辱めて、もその國家の體面をも汚すことあり、かくては、愛の徳、又何の用をあるおさん、されば、人をも、況く衆を愛せずばあるべからば、而してこそ、を愛するに、其の次第を守るべきあり。

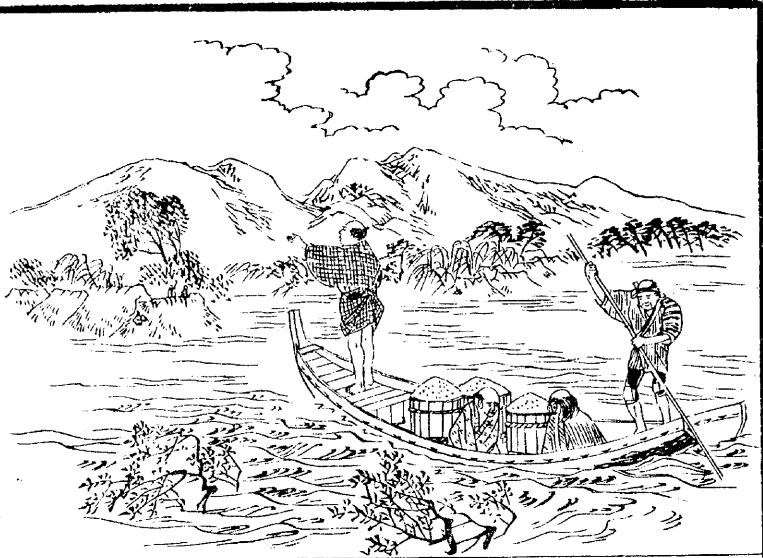
大谷某

昔因幡國鳥取に、大谷某といひし豪商ありて、米穀數千石を船載して安藝に來り、これを賣らん爲に、從者を陸に上せて、此の地の米價を探らしめけり、當時、安藝は、年饑名て、米價頗高く、民皆菜色ありけきば、從者急ぎかへりて、其のよき城告ぐるに、大谷聞きて喜べる色なく、眉を顰め頭を垂れて、やゝ久しく沈吟したりしが、遽に舟子を呼びて、ことごとく其の米穀を陸に運むしめ、これを散じて彼の窮民を賑はしけきば、領主其の高義に感じ、特に家士を

鳥取不遣り、彼の家不つきて厚く謝せしめけるとぞ、

奥貫友山

寛保壬戌の年、關東洪水ありて、武藏國入間郡は、殊に其の害を受くること甚しくして、田園民屋ごとごとく水中に没し、數十里の間、さぶら海のおどくなりき、當時、同國河越近在に、奥貫友山といふ人あり、天性仁愛お厚く、其の家饒なりけまば、急お食物を調へて舟お載せ、下僕と共に漕廻りて、餓おたる者おハ食を與



へ、病める者をば載せ歸りけり、されども猶飽うざりけん、其の父お向ひて、我等平生儉約を勤めしハ、今日の如き危急を救えんとてあり、されば、倉庫を開き、あらんかぎりれ金穀を散じて、窮民の救恤お充てむやと思

ひ侍り、大人これを許し給へとて、大釜粥を煮て、偏く彼等に施しけるが、これを取扱ふ下僕を誡めて、不遜の舉動あらしめけまば、人皆高義小感激して、落涙せざるはなかりけり、かくて金穀も盡きけまむ、己が所有の田園、居宅を質入して、再び米穀を買入れ、更ま盛小救恤しけり、かれば、是ふよりて死を起して生を得たりし者、十萬六千人小餘りしといへり、領主、友山を召して、之を賞し、時服佩刀を賜ひ、盛饌を設けて饗應せしに、友山飯二碗、羹一碗

を食ひしのみをりけまば、老職等怪みて、其の故を問ふに、今日窮民途ま充ちたり、僕一人此の美味を喫ふま忍びばとぞ答へける、

學ヲ修メ業ヲ習ヒ、以テ智能ヲ啓發シ、徳器ヲ成就シ、

學を修むとい、學問を勉強するをいひ、業を習ふとい、藝術を練磨する哉云ふ、故小學を修め業を習ひ、以て智能を啓發し、徳器を成就しとい、學問藝術を勉め習ひて、智哉、啟き徳をま

むべしと宣へるなり、智とい、事此是非善惡を
辨別する心のそとらき、徳とい、忠孝友和恭儉
博愛ふどの心性なるべし、

智と徳とい、人々生れおらふ保てるそのお
れども、學問藝術を以てこれを發育せざれば、
事理を通じて、實用お適をること能はば、かく
て、尊き智徳も其の功うを、故おらく宣へ
るなるべし、

皇后宮の御歌ふ、

金剛石も　みぶかむば　珠の光を　添は

ざらむ

人も學びて　後ふこそ　まこと此徳ハ

あらはるれ

とよませ給ひしも、亦此の聖旨と同じ御意ふ
るべし、人々、學問藝術を怠るへあらば、

柳澤里恭

柳澤里恭ハ、大和國郡山藩の老職なり、當時士
人を、禄を世ふる習ありけきば、老職ふどの
子弟ハ、其の禄此多く格の貴き哉頼みて、學問
技藝を勵むその少かりしが、里恭ハかゝる流

俗不陷らば、年少の時より文武の道を學習し、切磋練磨して、遂に鴻儒となりけり、然るに彼尚これ不飽足らばして、文武兩道の外、醫藥、音律、書畫、篆刻等不いたるまで、孜々として學び習ひけり。人の師となりて耻ぢざるほどの藝術、十六科の多きに及べり。中にも其の最名高かりしは、繪畫なり。常に支那元明時代の名畫を臨摹して、さら不一派を其間不開けり。殊不朱舜水の畫法を、祇園南海に學びて、奧妙を極めけり。其の彩色の艷麗なること、他人の

及びがたき所多ありけり。里恭のごときいよく學問、技藝を學習せしものと謂ふべし。

石黒甚右衛門

播磨國池田家の士石黒甚右衛門も、まこと藝術を勉強せし人なり。幼少より馭法を好みて、こゝろ以て身を立てんと思ひけり。其の遊戯するも、衆人は異なるの多かりき。襪を刀の兩端にのけて、これを手綱不擬し、毎日馭馬の戲をなすけるが、其のさま自ら馭術不かふひて、見るその感ぜしめけり。其の友佐貫又四



郎も亦馭法を好みけ
 きバ互に相砥礪して
 少時も怠らば起居飲
 食の間ふ心を馭法の
 外は遊ぶもめざりし
 ろバ遂に其の蘊奥成
 極めけり他人馬上ふ
 銃を發をれむ其の馬
 駭き逸するが常ふる
 に甚右衛門の乗る時

と、咫尺の間ふ發銃をるも其の馬静りかへり
 て、少しもさわるべ、又他人驚馬ふ乗まば、鞭つ
 こと志きりふれども、馬敢へて進まざるに、甚
 右衛門の乗る時ハ、鎧手綱を動さざるふ、奔
 走馳驅意に志たがひて、あさるも駿馬ふ乗る
 ふことならざりしとなり、

學小 日本修身書卷七 終

明治二十六年九月五日印刷
全 年九月十日發行

定價金六錢五厘

編述者

稻垣千頴
東京市下谷區中御徒町二丁目三番地

發行兼
印刷者

三浦源助
岐阜縣岐阜市米屋町廿二番戶

版權
所有

賣捌所

成美堂支店
東京市日本橋區本町一丁目一番地

代理店

石井鈎三郎
大阪市東區備後町四丁目

